



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	教育系大学における地域と連携した環境教育人材養成講座の試み(fulltext)
Author(s)	神村, 佑
Citation	環境教育学研究 : 東京学芸大学環境教育研究センター研究報告(25): 71-87
Issue Date	2016-03-18
URL	http://hdl.handle.net/2309/145230
Publisher	東京学芸大学環境教育研究センター
Rights	

教育実践研究報告

教育系大学における地域と連携した環境教育人材養成講座の試み¹⁾

神村 佑

東京学芸大学環境教育研究センター

**Trial of the Environmental Education Leader Training Lecture that
Collaborate with the Community in University of Education**

Yuw KAMIMURA

Field Studies Institute for Environmental Education, Tokyo Gakugei University

Field Studies Institute for Environmental Education at Tokyo Gakugei University started “the Environmental Education Leader training lecture” for university students from 2012, as a project out of the regular curriculum. This lecture has two important objectives. (1) Learning based on experiences in various fields related to environmental education. (2) Obtaining planning and management skills of environmental education programs. This lecture performed three contents, [1] Experience-based learning in various fields related to environmental education. [2] Supports for class work at schools around the university. [3] Implementation of environmental education activities in events.

This paper is a report of program and management about past lecture for four years. It is important that university of education collaborates with the community in school-education and social-education at not only out of the regular curriculum but also inside it. And it is necessary to coordinate with each section such as local governments and various organizations for school support more carefully more finely.

Key Words: university students, collaborate with the community, support for class work, social-education

1. はじめに

東京学芸大学環境教育研究センターでは、2012年度から大学生を対象として、将来、学校や地域社会の環境教育実践現場におけるリーダーとして躍動できる人材を、2年間にわたるプログラムで養成する「環境教育リーダー養成講座」を正課外のプロジェクトとして開講している。

本稿では、開講から足掛け4年間にわたる本講座のプログラムや運営を総括して報告する。そのなかで学校授業支援の取り組みに着目し、正課カリキュラムとの関係などを整理し、学校支援や社会教育の視点をふまえて、教育系大学における地域連携の在り方についても言及する。

2. 講座の概要

本講座では、(1) 自然体験、環境保全活動など環境教育に関わる様々な分野の現場における体験を通して学びを深めること、(2) 参加する学生が主体となり、小中学校や生涯学習の教育現場で環境教育プログラムを企画・実践すること、の二つの柱を掲げている。(以下、前者をフィールド体験学習、後者を企画実践と表す。) 開講当初は、この二つの柱に基づき、1年めをフィールド体験学習、2年めを企画実践としたプログラム構成を念頭に、講座運営を行ったが、2013年度途中(2年め途中)より、以下の3点の理由により、1年めと2年めの受講生を混在させ、一緒に学ぶことができる形式に変更した。まず一つめに、同じ内容のフィールド体験学習であっても、初回と2回目以降では違う学びを得られることである。二つめは、毎回の講座の参加者が多いほど、グループ学習としての利点を得られ、受講生同士の一体感も得やすく、グループで取り組む企画実践に向けて下地が整えられることである。そして三つめとして、運営側の負担軽減である。

本講座の実施内容²⁾は、大きく三つに分けることができる。(これまでに実施した内容及び2015年度の予定をそれぞれ一覧にまとめ、巻末に資料として掲載した。) 一つめは、環境保全活動などの体験や環境啓発系イベントへの参加、講師を招聘した座学など、環境教育についての多様なフィールドでの事例を、身体全体を使いながら学ぶものである(資料1)。森林保全活動、自然観察会、まち歩き、被災地へのスタディツアーなど、現地に赴く活動のほか、環境教育に関わる体験という点から、武蔵野うどんづくり、正月飾りづくり、組手什(くでじゅう)による棚づくりなど

を実施した。(以下、体験講座と表す。)二つめは、本学近隣地域の学校で行われる環境教育の授業支援への参加である(資料2)。本学は、近隣三市(小金井市、国分寺市、小平市)教育委員会と連携協定を結んでいることから、学校側の協力も得易く、教員を目指す学生にとっては貴重な現場研修の機会を得ている。(以下、学校授業支援と表す。)三つめは、学校以外のフィールドにおける環境教育実践プログラムの企画や運営である(資料3)。環境情報施設や公民館などの社会教育施設における講座の開催や、地域における環境啓発イベントでの出展などがこれにあたる。(以下、教育プログラム実践と表す。)

このような内容で本講座を展開した結果、2015年度からは2年間の講座を修了した上級生が、本講座の企画運営にも関わることに発展し、さらに幅広い能力と高い実践力を身につけることが期待できる事業となっている。

3. 実施内容

本講座を構成している3つの実施内容(体験講座/学校授業支援/教育プログラム実践)を二つの活動の柱に照らし合わせたものが表1である。学校授業支援は、体験学習と企画実践の二つのタイプに分けることができる。前者は、地域住民などがゲストスピーカーとして授業支援を実施し、その際に、学生が支援者のアシスト(支援)をするものである。これは地域住民による授業支援を、学生が体験するという位置づけにある。後者は、学生がゲストスピーカーとして授業支援を実施するものである。学生が、グループごとに教具の準備から当日の実践までを担うため、企画実践として位置づけることができる。

表1 実施内容と二つの柱の位置づけ

実施内容	二つの柱
1) 体験講座(座学含む)	環境教育に関わる多様なフィールドでの体験 (フィールド体験学習)
2) 学校授業支援	
3) 教育プログラム実践	環境教育実践の企画運営 (企画実践)

3-1: 体験講座

本講座実施内容一つめの体験学習を中心とした講座について、テーマごとに分類したものが表2である。入門編として非常にわかりやすい森林保全などの環境保全活動にはじまり、まちづくりや地域・伝統、暮らしなどの多岐にわたるテーマを取り上げた。更にサミットやフォーラム、学会などにおける発表や、ワークショップの手法を体験的に学ぶ機会を設けるなど、環境教育に関わる多様なフィールドそのものを、肌で感じながら学べるプログラムを組んでいる。単発の各講座以降も、学生が個々で関わりを持つことができるよう、基本的には大学近隣のフィールドを選定しているが、年に一度、東日本大震災の被災地を訪問するスタディツアーも実施している。

表2 体験講座のテーマ別一覧

テーマ	内容	フィールド
保全	森林保全（座学/活動）/かいぼり	相模湖/狭山丘陵
まちづくり	まち歩き/自転車めぐり	大学近隣
自然観察	自然観察会	大学内農場
農・畜産/暮らし	農場作業体験/循環型生活体験	南三陸/福島/南足柄
地域/伝統	武蔵野うどん/正月飾り/組手什	教室
フィールドスタディツアー	公害被害地域・災害被災地域の訪問	南三陸/福島/足尾
座学	フォーラム/セミナー	センター主催行事
発表・報告	サミット/フォーラム/学会	各イベント
ワークショップ	ふりかえりWS/チームづくりWS	

3-2: 学校授業支援

本講座実施内容2つめの学校授業支援について、まとめたものが表3である。これまでに三つのテーマにおける授業支援を実施し、このうち稲の学習については、同一年度内での継続的な支援が可能なテーマとなっている。5つの事例のうち事例4については、学生主体の授業支援になっており、(詳細については次章で紹介する。)前述した企画実践のタイプにあたる唯一の事例である。それ以外の4つは、地域の活動団体のメンバーなどが支援主体になっており、体験学習としての事例である。

表3 実施した学校授業支援のテーマ別一覧

テーマ	内容	対象	フィールド	事例
稲	田植え/稲刈り/正月飾りづくり	5年生	各校内田んぼ	事例1
	田植え/稲刈り		大学農場	事例2
地域	武蔵野うどんづくり	4年生	各校	事例3
	地域(ハケ・雑木林)学習	3年生	学校隣接雑木林	事例4
河川	生きもの観察	4年生	校外河川	事例5

3-3: 教育プログラム実践

これまでに大学を舞台とするものとして、大学祭と当センターが主催したイベントにおいて、子ども向けのプログラムを実施した。2014年度の大学祭では、自転車発電や牛乳パックを用いたはがきづくりなどの体験ができるブースのほか、地域の水循環を学べる模型や展示パネルを制作した。2015年度の大学祭では、災害をテーマに取り上げ、災害そのものを学ぶスペースと、災害後の暮らしに関する体験ができるスペースを設けた。前者では、ドライアイスを用いて竜巻が起こる仕組みを見る実験や、地震に関するクイズを出題した。後者では、新聞紙を用いた簡易スリッパ、キッチンペーパーによる簡易マスクの制作のほか、ライフラインが途絶え照明が無い状態を、暗幕で囲まれた空間で疑似体験できるプログラムを提供した。

2015年度からは地域における実践の機会を設けており、まずは行政による環境啓発イベントへ出展し、牛乳パックを用いたクラフトワーク、シャボン玉や化学電池の実験などを子どもたちに向けて実施した。今後、大学近隣の公民館と環境施設において、環境教育に関する講座の開催が予定されている。

これら本講座3つめの実施内容における特徴は、このような実践現場の設定や調整のみを当センターにて行い、プログラム内容については、学生がグループで検討し、企画から運営、実践、評価に至る全ての過程を経験し、より実践的な能力の向上を図る機会となっている点である。グループでの合意形成に始まり、プログラム内容の工夫のほか、現場における緊急対応など、個人にとってもグループにとっても課せられる役割は多様である。それらを経験することに加え、出てきた反省や課題等、評価に関する部分までを、自分たちで行うことによる学びは大きく、この企画実践を経験しているか否かの差が、受講生の間でもはっきりと見ることができる。

4. 学校授業支援における詳細

前章において、本講座の実施内容3つを紹介したが、そのうちの学校授業支援について、フィールドや主体者によって分類した（表4）。構成要素による分類に、5つの事例を当てはめ、その中で本稿において取り上げる地域との連携の観点から汎用性のある取り組みとして学校の敷地内での事例3つをそれぞれタイプⅠ～Ⅲとし、支援者と学校との関係性、及び実施スケジュールの観点から整理したい。そのうえで、学校授業支援の取り組みの意義や効果についても言及する。

表4 学校授業支援における構成要素

フィールド		主体者	二つの柱	事例	(タイプ)
学校	校外（フィールド）	地域住民	1) フィールド体験	事例5	
		センター		事例2	
	敷地内	屋外		地域住民	事例1
		屋内		事例3	タイプⅡ
			学生	2) 企画実践	事例4

4-1. 学校授業支援の分類

タイプⅠは、5年生を対象とした稲の学習における授業支援である。学校の敷地内にコンテナ田んぼやバケツ田んぼが（もしくは空きスペースに田んぼを作ったというケースも）あり、その学校に出向いて授業を実施しているグループ³⁾がいる。学校では、このグループを支援者に迎え、田植えから始まり、稲刈りや脱穀、稲藁を用いた正月飾りづくりを、年間を通した稲の学習として、総合的な学習の時間で実施している。学生はこれらのアシスト役を担うことで、授業支援に参加している。まず、この支援グループが、それぞれの学校とある程度濃い関係性を持っていることが前提として挙げられる。このことにより、年間を通した大まかなスケジュール（例えば〇月中旬頃など）が、学校側に組み込まれており、単発の授業支援とはならない状況にある。ただし、詳細なスケジュールは学校行事などの影響を受け、直前にならないと決まらないうえ、主に屋外での体験になるので、天候にも左右され、当日にならないと実施の可否が決まらない場合もある。

タイプⅡは、小平市立小平第四小学校における地域の伝統食を取り上げた郷土学

習の支援である。本学の所在する武蔵野地域では小麦の生産が盛んだったことから、うどん文化が根付いており、その武蔵野うどんづくりを体験する授業支援が実施されている。この事例では、学校がコミュニティ・スクールに指定されており、またそれ以前から地域に開かれた学校作りを実施していたこともあり、支援者と学校との関係は深い。タイプⅠでは、市内各校を同じグループが巡回しながら支援していることに対して、この支援グループは一つの学校にのみ関わっており、多岐にわたるテーマでさまざまな授業支援を実施している。この点も、より深い関係性を構築している要因である。また、コミュニティ・スクールとして体制が整っているため、コーディネーターなどを介して年間スケジュールが組み立てられ、さらにうどん作り以外にもさまざまな授業支援を実施していることから、それらも含めた細かなスケジュールを時間的な余裕をもって調整することが必要とされ、結果的にこの事例においては、ある程度事前にスケジュールが決定する運びとなっている。

タイプⅢは、小学校の授業に大学生が主体となって支援するケースである。この小学校では、ハケと呼ばれる国分寺崖線について、またそのハケにある雑木林について、学校全体の地域学習のテーマとして取り上げている。この授業支援自体の対象は3年生であるが、上級生もこのフィールドを絡めた多様な学習を実施しているという背景がある。この学校もコミュニティ・スクールに指定されており、また指定前から地域住民による学校支援が実施されていた点は、タイプⅡと同様である。この3年生への授業支援については、年間を通して数回雑木林に出かけていく授業支援を、地域の支援グループが担っている。その一連の支援のなかで、子どもたちが調べ学習を行い、そこから出てきた質問を学生が答えるという授業支援が実施されている。つまり地域の支援グループが担っている一連の授業支援のうちの1回を学生が担当していることになるため、学生の参加度に直結する大学のスケジュールが考慮され、学生の夏休み期間に実施日程が割り当てられている。年間を通じた大まかなスケジュールが立てられているうえに、大学側の細かなスケジュールもふまえたうえで、支援日程を設定しているという珍しいケースだといえる。

以上のように、3つのいずれのタイプも、支援者と学校との関係性が既に構築されているところへ、新たな協力者として学生が参加しているものである。スケジュール調整の点からは、当日の天候の影響もある直前型、ある程度事前に組み立てられる事前型、学生の都合も考慮された学生主体型に分けることができる。

4-2. 学校授業支援における意義・効果

また、これらの学校授業支援に関して、以下のような意義が挙げられる。

まず学生にとって、自ら体験して学んだものを実践に活かすことができる機会である点である。体験講座において、武蔵野うどんづくりや正月飾りづくりを学び、そのうえで学校授業支援に参加することで、より深い学びと実践につながる可能性がある。また両者とも、体験講座における講師と授業支援者が同じであるため、大人向けのプログラムとして構成されている体験講座のなかで、子ども向けのプログラムである授業支援との差異などにも触れることができ、より実践的な学びを得られる機会となっている。

次に、学生が授業支援におけるさまざまな立場に触れ、それらを理解することができる点である。授業支援は、学校教員と地域の支援者の協力により成り立っている。その両者は当然ながら、両者をつなげる役割をもつコーディネーターの重要性も理解することができる。学生は全員が学校教員になるわけではないが、教員になった場合は支援者やコーディネーターの役割を理解していることは非常に大きな意味を持つ。また教員ではなくても、一人の住民として、地域の支援者やコーディネーターの立場で外部から学校に関わる可能性もあり、その際にこれらの経験を活かすことができる。さらに、学校教員への理解が、授業支援における協働を円滑に進めることにもつながる。いずれにしても、さまざまな立場を理解しておくことは、現場における協働において、大きな利点となる。

さらに、学生にとって多様な能力を向上する機会である点も挙げられる。支援者の中には、これまでの多くの経験により非常に高い教育実践力を保有している者もおり、その実践を目の当たりにすることや、さらに学校教員による学級経営にも触れられることで、教育に関する諸能力の向上につながる。くわえて、多様な地域住民と交流する機会でもあるため、社会性や規範性なども学ぶことができ、学生にとっては、総合的な学びの機会となっている。

一方で、支援者にとっては以下の効果につながっている。まず、地域の支援者は年齢層が高いことが多く、年代の若い学生と関わることによって、意欲が醸成されている点である。自身の子ども世代よりも若い学生の年齢層と関わる機会が少ないため、支援を通じた時間の共有が貴重な機会になっている。協働した支援者からの意見や感想の多くがまずこの点に触れられており、そのことから効果は大きいと

言える。また、全ての支援者が高い教育実践力を持っているわけではないため、学生に触発されてその能力が伸びていくこともある。例えば、学生が子どもと触れ合うなかで、初対面でもすぐに名前を覚えて呼ぶ姿勢に感化され、翌日はメモをとりながら同じように名前を呼ぶよう心掛けた支援者がいた。教育現場におけるこのようなさりげない工夫や気遣いなどを、学生と支援者がお互いに学び合う機会になっていることがわかる。

学校授業支援の取り組みは、以上のように、学生と支援者の両者にさまざまな効果を与えている。

5. 参加学生の背景からみる本講座の意義

本講座の対象は、本学の大学生及び大学院生で、分野も全ての選修・専攻としている。実際には、学部1～3年生が中心であり、年によって違いはあるものの、環境教育を専攻する学生が80～90%を占めている。受講生の中心である環境教育を専攻している学生について、その背景にある正課カリキュラムをふまえたうえで、本講座の意義を考察してみる。

本学は大きく教育系と教養系の2つに分かれており、環境教育専攻は教員免許取得が必須でない後者に属している⁴⁾。取得できる教員免許は、中学および高校の理科、あるいは中学社会・高校地理歴史である。そのため、1年生は教育基礎および科目(理科・社会)基礎の授業が多く、直接的に環境教育に関わる授業は主に2年生になってから受講できるカリキュラムとなっている。この点は、環境教育が非常に広い分野を対象としていること、基礎の上に応用が成り立っていることをふまえると当然のことと言える。しかし本学環境教育専攻出身である筆者の経験からふまえても、その時点でそれらの基礎科目と環境教育とが結びつくのはなかなか難しく、入学時あるいはそれ以前に抱いていた環境教育を学ぶ意欲などは、残念ながら時間の経過と共に減少しているように見受けられる。

そこで、4月に実施している新入生研修を、本講座の第0講と位置づけ、わかりやすい「環境教育」を学ぶ機会としたところ、これからの大学生活や環境教育についての学び、また将来についての意欲的な記述が参加者の感想から多く見られた。このことから、正課外の本講座においては、そのような意欲の喪失を防ぐ役割も果たすことができると推察できる。

もともと、本講座の実施にあたっては、正課での授業の理解を深めることが目的の一つとして考えられていた。正課の限られた時間内では、フィールドでの体験学習の実施は容易ではなく、多くても半期に2～3回程度である。ただし、その分理論を学ぶ座学は削られることにもなり、教員は一つの授業における全体内容を考慮してフィールドワークを組み立てる必要がある。本講座においては、理論的な内容はある程度正課カリキュラムなどで学んでもらうという姿勢を打ち出しており、体験学習を重視することを前面に押し出してきた。当然、最低限の座学は実施しているものの、その専門性を深める内容にまでは至らせる必要がないという背景がある。

本講座の対象は前述の通り学内全分野の学生であり、体験的に環境教育を学ぶことを重視している点も含め、内容的には入門編の講座として位置づけている。環境教育を志望して専攻に所属している学生のみでなく、環境教育についてあまり触れたことが無い学生も一緒に学ぶことを前提としている。プログラムの企画実践においては、環境教育に関する知識などの差が表出しやすいが、グループでの実践における個性（例えばイラストが得意、盛り上げ役を担える、責任感があるなど）の一つとしての認識でしかなく、大事なのは意欲や関心と、それに基づく参加度であると考えている。すなわちそのような学生に対して重要なのは、意欲や関心を高く保つことであるといえ、この点においては講座内容の構成にあたり、留意しながら実施してきた。

以上のような背景から、本講座の役割として、後の授業（正課カリキュラム）での理解を深めることと、環境教育を学ぶ意欲の喪失を防ぐ、或いは更なる意欲の増進につなげること、大きくはこの2点を担うことが求められていると考えられる。

6. 本講座の成果

まず挙げられるのは、プログラムが充実してきたことである。初年度は体験講座のみであったが、2年目から学校授業支援が始まり、3年目からは教育プログラム実践を実施するに至った。くわえて4年目からは、2年間の講座を修了した上級生が本講座の企画運営にも関わり、幅広い能力と更に高い実践力を身につける機会となっている。また、例えば4章で述べたように、体験講座での学びを学校授業支援へ活用できるようになるなど、各プログラムの連携も高めることができた。

また、地域連携という点からは、以下の四つの団体・機関と連携しながら、活動

を実施できたことが挙げられる。一つめは地域における環境活動団体で、これは主にフィールドでの体験講座における連携である。特定メンバーによる講義などだけでなく、その定例活動に参加するなど、団体全体との関わりを持つことができ、好事例における一面的な学びではなく、それぞれの課題等にも触れ、より現実的で深い学びを得ることができた。二つめは地域の学校支援団体である。前述の通り、各団体による学校授業支援に学生が参加し、相互に学び合う効果を生んでいる⁵⁾。三つめは地域の学校である。学校授業支援を実施するにあたっては、学校との連携が欠かせないことは言うまでもない。最後の四つめは地域の行政である。教育プログラム実践の実施において、イベントでの出展や講座の開催は、行政による支援と協力が無ければ成し得ないことである。さらに関係部署との連携が構築されたことで、継続性も拓けている。

7. 教育系大学における地域連携

本章では、前章までに述べてきた本講座の展開をふまえ、教育系大学における地域連携について言及したい。

平成18年の教育基本法改正及び平成19年の学校教育法改正により、大学の責務に社会貢献が加わり、各大学は教育研究の成果を広く社会に提供することを求められるようになった⁶⁾。最先端の学術等を用いた研究開発における産学連携はもとより、大学の所在する地域との連携を密にすることで地域への貢献度を高めることが、各大学の社会貢献の一環として広がっていき、現在では各大学各専門分野を活かした地域連携に関する多様な事業が実施されている。

教育系大学として、その専門を地域で活用するためのフィールドは、学校教育と社会教育であることは言うまでもない。現在、4年制国立大学は86大学あり、そのうち教育学系・教員養成系は59大学に設置されている⁷⁾。そのなかで、附属学校は54大学⁸⁾にあり、それぞれの大学において、教育に関する高度な研究開発および実践を附属学校と協力しながら進めている。これは専門分野による研究開発等にあたる部分であり、これらを活用した社会貢献/地域連携となると、附属学校ではなく、地域に存在する各学校との結びつきを強める必要があるといえよう。

教育に関する社会貢献というと、まずは学校や公民館などへの出張講座（いわゆる出前授業）が挙げられる。これは企業によるCSR（corporate social responsibility）

活動でも、その専門性を活用して実施されていることが多い。しかし、教育系大学に求められているものは、大学他分野や各企業が専門性を活用した出張講座とは少し意味合いが異なる。学校教育や社会教育の制度や意義などにも関わりながら教育実践を行い、そこで得られた成果や課題をもとに研究や教育実践を重ねることそのものが、教育に関する研究開発及び実践の一つとされるためである。

このような学校教育及び社会教育での地域連携において、協働すべき相手は前章で挙げた四つの機関・団体である。環境教育をテーマとしている本講座では 一つめの地域活動団体が環境活動を実施している団体であったが、教育に関する他分野においては、地域活動団体の専門性が環境から別の分野に替わるのみで、その他の連携先は同様に、学校支援団体、学校、行政との連携が必須になる。

さらに、一括りに各機関・団体との連携と捉えるのではなく、学校教員、地域の支援者、コーディネーターなどの個人との関わりのうえで、学校、行政、施設などとの関わりとなるため、より丁寧な対応が求められる。学校により教育における特色は様々であり、社会教育施設においても同様であり、行政に至っては、教育行政と専門分野の担当（環境教育では環境担当）部署と、少なくとも二つの連携先がある。大枠では四つの連携先ではあるが、結局のところ、一つ一つの連携先との関係性の構築、さらには先方の細かいニーズを踏まえた対応による良好な関係性の構築が欠かせないと言える。

8. 今後に向けて

これまでの活動をふりかえると、大学生による体験学習や企画実践は、地域からのニーズが非常に高いことが一番強く感じられる。地域における活動の多くは、関わる人々の年齢層が高い。そのため、例えば、フィールドでの体験学習に関わるような地域で環境活動を実施している団体からは、労働力としての若い力を求められるケースから、柔軟な発想を生み出す企画力を求められるケースまである。学校授業支援においては、ある副校長が「子どもたちの目の輝きが違った」と感想を述べていたように、子どもたちに近い年代の大学生による支援は、子どもたちの意欲を増幅させることにもつながっているようで、この取り組みに対する学校側の期待は大きい。前述のとおり支援者からも、若い大学生との関わりという点から歓迎されている。同様に社会教育施設においても、多様な教育実践を実施する点などから、

若者による関わりを熱望されることが多い。ある企画へ参加者として合流することはもちろん、運営側として企画実施へ関わること（例えば自主講座等の開催）はさらに大きな成果として捉えられていることによる。

一方で、本講座として取り組める時間や内容には限りがある。もともと正課外の事業であるため、受講生は正課の授業の合間（更には、部活やサークル、アルバイト等で多忙な合間）を縫って参加している状況で、体験講座などは必然的に土日休日の開催が多くなる。例えば、地域団体の定例活動日が平日である場合は、参加することはほぼ出来ない。社会教育施設での教育実践も同様に土日休日でなければ実施は難しい。仮にその二つは土日休日に取り組むことができたとしても、最大の課題は学校授業支援である。これは、授業は平日にしか行われていないが、大学生も平日は正課の授業がある。4章で分類した学生主体型のように、長期休み等を利用した場合は実施が可能で、継続性もあるが、本講座の受講生のみでは、同時に複数校を実施することはできず、年間に1~2校が限度である。

学校授業支援では、本学の特長を活かすべく、正課での取り組みを期待したいところだが、4章で述べた直前型のように、天候等に左右される場合は、日程の調整が非常に困難で、取り組みが広がりにくいことは容易に推測できる。学校側の授業と大学の該当する授業日程が重なり実施計画が立てられたとしても、雨天順延により実施に至らないことも多くあると考えられる。その点において、事前型はスケジュール調整の融通性が高く、学校/大学の両者にとって、取り組みやすいことから、まずは事前型における学校授業支援が広がることを期待したい。また前述の学生主体型も、本講座での取り組みには人数の関係で限度があるものの、学内の他事業や、正課での取り組み（集中授業など）などの展開が期待できる。

いずれにしても、本講座の性質をふまえるとこれまでの〈体験講座・学校授業支援・教育プログラム実践〉を増幅させることよりも、それぞれのプログラムの質を向上させることが受講生の学びの向上につながると考えている。例えば、前年度までは体験講座の学びを学校授業支援に活用する連関のみだったが、今年度は体験講座にて訪問した福島での学びを基に、災害をテーマにした教育実践企画を実施するなど新たな連関が生み出された⁹⁾。実施には至らなかったが、社会教育実践での企画においても、訪問先の関係者を招聘するなどの提案がなされた。このように受講生の自主性は確実に向上しており、それらに柔軟に対応していくことが、今後の本講座

の運営における一番の勘所であると言える。¹⁰⁾

謝辞

本講座の運営に際し、体験講座や学校授業支援を受け入れてくださった関係者の方々、また教育プログラム実践の機会をご提供くださった関係者の方々の、多大なるご支援ご協力に御礼申し上げます。そのほか、運営に関わってくださった全ての方々に感謝いたします。

註

- 1) 本稿は、日本環境教育学会第26回大会（名古屋）（2015年8月22日）における同題での発表に加筆修正したものである。
- 2) 各年度の詳細な実施報告は、それぞれ当センター研究紀要『環境教育学研究』の第22号（2013）から第24号（2015）に掲載されている。（2015年度については、今号巻末に掲載予定。）また当センター Web サイト<http://www.fsifee.u-gakugei.ac.jp/fsifeedoc/proj_eeleader2014.html 2015年11月4日アクセス>にも同様に詳細な内容を掲載している。
- 3) このグループは、当センター付設教材植物園（農場）の水田の一面を借り、種の塩水選からはじまり、田植え、収穫、藁を用いた正月飾りづくりまで、米作りの一年の流れを子どもたちに体験させる食農教育を、毎年実施している。
- 4) この編成は平成26年度までで、平成27年度新入生からは、学校教育系と教育支援系に改編され、環境教育を学ぶコースは学校教育系に属し、初等教育教員養成課程環境教育選修となり、小学校教員免許取得が必須になっている。
- 5) 学校授業支援の取り組みなどにおける、学校外の支援者自身への教育効果等については、本学に機構本部が設置されている「大学間連携による教員養成の高度化支援システムの構築-教員養成ルネッサンス・HATOプロジェクト-」にて、研究が進められている。詳細は、同プロジェクト Web サイト<<http://hato-project.jp/index.html>>を参照いただきたい。
- 6) それぞれ文部科学省 Web サイトを参照した。教育基本法：「改正前後の教育基本法の比較（pdf資料）」<http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/06121913/002.pdf 2015年11月30日アクセス>、学校教育法：「学校教育法等の一部を改正する法律について（通知）」<http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07081705.htm 2015年11月30日アクセス>
- 7) 文部科学省 Web サイト<http://www.mext.go.jp/b_menu/link/daigaku1.htm 2015年11月10日アクセス>

セス>にて全体数を確認し、教育学系・教員養成系については、各大学Webサイトにて学部/専攻を調査した。名称は大学ごとに異なるが、学部内容紹介等から教育学系・教員養成系であると判断した。なお調査対象は、学部および学科までに留めており、その下位のコースなどは除外した。

- 8) 註7と同様に各大学Webサイトから確認した。教育学系・教員養成系の学部学科があるものの、附属学校が設置されていないのは、北海道大学、東北大学、京都大学、大阪大学、九州大学の5大学である。一方、教育学系・教員養成系の学部学科がないものの、附属学校が設置されているのは東京芸術大学、東京工業大学の2大学であった。
- 9) 企画立案にあたって当センターから助言をする場合もあるが、この企画の発想は「せっかく福島で震災のことを学んだから（去年も南三陸で学んだから）、それを活かしたい」という受講生の思いから生み出されたものである。
- 10) 修了生のみによる運営も視野に入れているが、註4の通り、学部の改編によって環境教育コースの学生は更に多忙となっていることから、課題も多い。これらを考慮すると、より学校に関わる（学校授業支援などの）取り組みへの展開が、受講生からの要望として想定され、正課との関連性を高めながら運営していくことが大きな課題である。

資料

資料1 環境教育リーダー養成講座における講座一覧

	日程	タイトル/内容	実施場所
2012年度：第1期生			
第0講	2012/7/28	キックオフプログラム/武蔵野うどんづくり	環境教育研究センター
第1講	2012/8/19	森を体験しよう	相模湖畔
第2講	2012/8/25	ふゆみず田んぼを知ろう	環境教育研究センター（農園）
第3講	2012/11/3-4	南三陸町で学ぶ（フィールドスタディツアー）	宮城県南三陸町
第4講	2012/12/22	エクセルギーハウス・トランジション	小金井市環境楽習館/環境教育研究センター
第5講	2013/2/2	環境教育One-Day Field Trip	こぶた畑（神奈川県南足柄市）
第6講	2013/2/15	第4回小金井・国分寺・小平 環境教育実践フォーラム	環境教育研究センター
第7講	2013/3/9	第32回環境教育セミナー	環境教育研究センター
2013年度：第1期生			
第8講	2013/4/13	まちあるき事前学習会	くにたち郷土文化館
第9講	2013/4/20	くにたちdeまち歩き	国立市内
第10講	2013/7/20	第33回環境教育セミナー	環境教育研究センター

2013年度：第2期生			
第0講	2013/5/11	新入生研修	長池公園（八王子市）～小山田緑地（町田市）
第1講	2013/6/9	森づくりについて学ぼう	環境教育研究センター
第2講	2013/6/16	森を体験しよう	相模湖畔
2013年度（※以降、1年めと2年めの区別無し。なお第3講は諸事情により中止。）			
第4講	2013/7/27	武蔵野うどんづくり	環境教育研究センター
第5講	2013/8/26	足尾銅山フィールド研修ツアー	栃木県日光市足尾町周辺地域
第6講	2013/9/20	自然観察会	環境教育研究センター（農園）
第7講	2013/10/12-14	南三陸で学ぶ（フィールドスタディツアー）	宮城県南三陸町
第8講	2013/11/23	高校生環境サミット@つばさ総合高校	東京都立つばさ総合高等学校
第9講	2013/12/22	正月飾りづくり	環境教育研究センター
第10講	2014/1/30	第5回小金井・国分寺・小平 環境教育実践フォーラム	環境教育研究センター
第11講	2014/2/28	エコなワザを学ぶ	環境教育研究センター
2014年度			
第1講	2014/5/18	森林保全活動	相模湖畔
第2講	2014/6/22	こがねい自転車まちめぐり	小金井市環境楽習館
第3講	2014/7/26	武蔵野うどんづくり	環境教育研究センター
第4講	2014/9/22-24	くだかけ生活舎	神奈川県足柄上郡山北町
第5講	2014/10/11-13	南三陸（フィールドスタディツアー）	宮城県南三陸町
第6講	2014/12/10	正月飾りづくり	環境教育研究センター
第7講	2014/12/13	第8回グローブ日本生徒の集い	オリンピックセンター
第8講	2014/12/20	2014年度環境教育セミナー	環境教育研究センター
第9講	2015/1/22	第6回小金井・国分寺・小平 環境教育実践フォーラム	環境教育研究センター
第10講	2015/3/23	ふりかえりWS	環境教育研究センター
2015年度			
第1講	2015/5/24	武蔵野うどんづくり	小平市津田公民館
第2講	2015/6/28	かいいぼり	菩提樹池（埼玉県所沢市）
第3講	2015/8/3	きたまちスクール	（小金井市）公民館貫井北分館
第4講	2015/10/12-14	福島FS：二本松・東和地域に学ぶ	福島県二本松市東和地区
第5講	2015/11/28-29	小金井環境フォーラム2015@環境楽習館	小金井市環境楽習館
第6講	2015/12/9	正月飾りづくり	小金井市環境楽習館
第7講	2016/2/11	第7回小金井・国分寺・小平 環境教育実践フォーラム	環境教育研究センター
第8講	2016/3/17	ふりかえりワークショップ	環境教育研究センター

資料2 環境教育リーダー養成講座における学校授業支援一覧

実施校	日程	対象	テーマ
2013年度			
国分寺市立第八小学校	2013/10/8	3年生	ハケの学習
小金井市立東小学校	2013/10/21	4年生	野川
小金井市立小金井第一小学校	2013/10/4	5年生	稲の学習「稲刈り」
小金井市立小金井第四小学校	2013/12/17・18	5年生	稲の学習「正月飾りづくり」
2014年度			
国分寺市立第八小学校	2014/10/8	3年生	ハケの学習
小平市立小平第三小学校	2014/10/16	5年生	稲の学習「稲刈り」
小金井市立小金井第四小学校	2014/12/16・18	5年生	稲の学習「正月飾りづくり」
2015年度			
国分寺市立第八小学校	2015/10/16	3年生	ハケの学習
小平市立小平第四小学校	2015/5/27-29	4年生	地域学習「武蔵野うどんづくり」
小平市立小平第三小学校	2015/6/12	5年生	稲の学習「田植え」
	2015/10/20		稲の学習「稲刈り」
小金井市立小金井第四小学校	2015/6/2	5年生	稲の学習「田植え」
	2015/11/17		稲の学習「稲刈り」
	2015/12/22		稲の学習「正月飾りづくり」

資料3 環境教育リーダー養成講座における学校以外での教育実践一覧

イベント名	日程	開催場所	実施内容/テーマ等
2014年度			
小金井祭（大学祭）	2014/11/2-3	東京学芸大学	自転車発電、ハガキづくり、展示など
第8回グローブ生徒の集い	2014/12/13	オリンピックセンター	スノードームづくり（テーマ：生物多様性）
2015年度			
小平環境フェスティバル	2015/9/12	ふれあい下水道館	牛乳パック工作、化学電池実験など
小金井祭（大学祭）	2015/10/31-11/2	東京学芸大学	簡易スリッパ/マスクづくり、暗闇体験、展示など（テーマ：災害）
小金井市環境楽習館 環境講座	2016/1/23	小金井市環境楽習館	凧づくり
公民館貫井北分館（小金井市） 若者による自主講座①	2016/2/20 午前	公民館貫井北分館	学校における環境教育実践
公民館貫井北分館（小金井市） 若者による自主講座②	2016/2/20 午後	公民館貫井北分館	GEMS教育を学ぶ